

繊維系三学会合併に関する協議会

(第8回) 議事録

【日時】 2025年4月8日（火）13時から17時

【開催方法】 ハイブリッド開催

【会場】 京都大学 東京オフィス（オンライン：zoom）

幹事学会：（一社）繊維機械学会

【出席】

日本繊維製品消費科学会 大矢勝、西良造、山田勲（OL）

日本繊維機械学会 田上秀一、西脇剛史（OL）、金井博幸（OL）、高平恭護

繊維学会 辻井敬亘、濱田仁美、村瀬浩貴、増田正人、木村睦、山本恵美

WGメンバー（OL）；藤田雅夫、内田哲也、喜成年泰、武野明義、中澤靖元、櫻井伸一、

道信剛志、勝真理、タケシタコウジ、西村正樹、竹本由美子、深沢太香子、小野努

※OL：オンライン

【内容】 司会：辻井敬亘

1. 前回会議の確認

- ✓ 3月に会長・事務局長会を開催して各学会の状況を共有した。今後の進め方を検討する上で、早急に協議会を開催すべきとの判断に至り、本日の開催となった。また、3月に品川社会保険労務士会会長の鈴木社労士との面談をハイブリッドにて実施したことが報告された。鈴木社労士からは、今後の進め方や必要な手続き、留意点などお伺いした。また、もし合併が確定となった場合には、事務職員の個別ヒアリングも行ことが望ましいとのアドバイスがあった。次回以降は、相談に費用が発生するが、今後も適宜、鈴木社労士と相談することで了承が得られた。

2. 各学会からの報告

- ✓ 三学会合併案の最終検討段階として最終案の纏めが必要なことが伝えられた。第一次協議案を各学会に持ち帰り検討いただいた結果を受け、本協議会としての最終案を検討し、今一度各学会に持ち帰って検討。その後、議決権行使へ進めるかどうかの判断をしていただくことになる。
- ✓ 本日出席のワーキングメンバーにもオブザーバー参加として自由に発言いただきたいこと伝えられた。
- ✓ 田上会長より、日本繊維機械学会では、オンラインとハイブリッド開催で3回意見交換会を開催したことが報告された。殆どがオンラインでの参加で、参加者数は60名ほどであった。理事会との意見交換も4回実施。別紙にて意見交換会の記録が共有された。理事会での印象として
 - ・ 学会名は、「日本繊維学会」が妥当である。
 - ・ 学会誌は3学会が一緒になることで情報量が減ることや電子化に対する懸念する意見あり。
 - ・ 論文誌に関して、クオリティの検証を希望する声と、公開ツール（J-stage）の国際的な認知度の低さが指摘された。
 - ・ 事務局が運営に十分関与してくれることを前提に、秋季研究発表会開催については反対意見なし。
 - ・ 研究会（研究委員会）に関しては、既存を基本継続することを希望。
 - ・ 一法人化により、研究会活動がやり難くなるのではとの懸念の声あり。また、運営方法を選択式（3タイプ）とすることで運営が煩雑になるのではないかと。研究会の存続や運営管理に関する規定作りが必要。

- ・研究会の活性化を図る観点から、会員以外の参加を求める声多数あり。
 - ・諮問委員の設置に関しては、その役割を明確にすべきとの意見あり。
 - ・事務局に関しては、2拠点体制が圧倒的な支持。1拠点となった場合の学会活動低下を不安視する声大。繊維業界の性格上、大阪拠点は必須との声が企業から多く上がった。
 - ・一法人化による法人会費の支出を下げたいという意見は聞かれていない。広告収入の心配はあるが、法人会費の広告掲載権利付与については好意的な感触。
 - ・第一次合併協議案に関しての修正依頼はなし。
- ✓ 大矢会長より、日本繊維製品消費科学会では、会員説明会を3回オンラインで開催したことが報告された。参加者数は合計で30名程であった。
- ・説明会での合併に関する否定的な意見はなかった。
 - ・懸念事項として、前回否決された繊維学会に対して「今回は大丈夫だろうか」との意見はあった。辻井会長はじめ、執行部の丁寧な対応で今回は大丈夫であろうと伝えるに留めた。
 - ・合併スケジュールについては柔軟に進めることで理解を得た。
 - ・財務については、企業から会費を減らしたいとの希望あり。今後のシミュレーションに反映すべき。
 - ・事務局の財務に関する問題については、素人でもわかるような明確な説明が欲しいとの希望あり。
 - ・ビジョン・ミッションについても明確で、将来構想を見据えた捉えた意見が多かった。
- ✓ 辻井会長より、繊維学会では、公聴会をハイブリッドにて4回開催したことが報告された。各回ともに参加者は40名程であった。また、辻井会長、執行部が各支部や若手研究委員会メンバーを訪問し直接の意見交換を行なったこと報告された。200名近い方々と議論はしたが、あくまで延べの人数であり、参加メンバーとしては限定的である。公聴会や意見交換会では、
- ・第一次合併協議案については、あくまでも協議会でまとめた議題として、今後、様々な課題を抽出した上で、より良い案を最終案とするスタンスで説明をおこなった。
 - ・3学会合併協議又は提案に対しての会員各位への周知はまだ十分ではないと感じている。
 - ・協議案に対する大きな3つの意見は、事務局問題、財務問題（人件費を含め）、運営負担であった。主な意見として、合併によりどのように問題が改善されるのかが十分に見えないという指摘あり。理事会は、公聴会での指摘を元に意見交換を行なった。
 - ・ビジョン・ミッションについては賛成多数。実際に実施する上での施策について要検討。
 - ・合併検討を進める上で、「現状の活動を継続」というスタンスから、「活動自体をゼロベースで見直し」することが重要ではないか。これまでのリソースは大事にしつつも、しっかりと見直しした上で活動としてはどうか。例え、結果的に同じ体制になったとしてもゼロベースとして見直す考え方が大事ではないか。前回の合併協議の際は、現状の活動が維持できるというスタンスだけが見えていた。今回は、そこから一步踏み込んで議論したい。
 - ・会費等収入の見込みや事務局経費などを検討すべく財務グランドデザインが提案された（会費／広告パッケージ化を止めるということではなく現状を加味して算定するため）。また、事務局の1拠点と2拠点の際の固定費比較（120万円程度の差）を踏まえ2拠点化のメリットどう考えるか。
 - ・第一次合併協議案に対するフィードバック案を提案し、以下のポイントについて意見交換を行った。
 - ・課題ごとに以下のカテゴリー①②③の切り分けを検討していくことを提案。

- ① 今検討しておくべきこと：三学会合併可否判断に必要な事項（大きな方針、一学会となるメリット・目指すもの、運営体制・財政面の想定、主要活動の実施など）
- ② 三学会合併合意後、新学会スタートまでに具体的に検討すべきこと
- ③ 新学会発足後、活動の中で検討していくべきこと

3. 課題毎の意見交換

【全体構想】

- ✓ 各学会の会員構成（繊維学会1,500名、日本繊維機械学会、日本繊維製品消費科学会500名から600名前後）川上から川下まで主力担当分野が異なる。年齢構成は各学会共に高齢化（若手が集まってきていない現状；運営体制に大きく影響するのではないかと、今後益々若手への負担集中の懸念あり）。これまでの20年とこれからの20年の年齢構成を見ると加速的に会員が減る懸念あり。一方で、3学会ともに財務的にはいろいろ手段もあり単年度決算で言えば、収支相償。一部の会員あるいは、事務局への負担が大きすぎないかについても要検討。
- ✓ 合併協議の最終案では、単に現在の活動維持での合併ではなく、新しい学会として生まれ変わり日本の繊維を代表する学会として今まで取り込めていなかった分野を取り込み、それによって会員が学会に在籍（入会）するメリットを感じてほしい。魅力的なプラットフォームを提供する必要がある。学会のグローバル展開なども当然必要。第一次合併協議案の全体構想として、発展性の共有が必要。
- ✓ 単に3学会の和集合となるだけでは根本的な解決にはならず、ミッション・ビジョンの共有と新たな仲間集めが大事。3学会が抱える現状の問題を解決し、現状維持ではなくV字回復を見通した形の最終案提案。
- ✓ 3学会会員の相互交流も必須。一緒になる人がどういう人なのか、どういう分野の方なのか理解いただいた上で最終判断を仰ぎたい。合併協議に参画しているメンバーだけでなく、一般会員の方々も含め、ぜひ新しい学会として良いスタートを切るためにご助力いただきたい。
- ✓ 現在は財務についてベストケースで提案しているが、先行きが厳しい状況も見えている中で、事業規模の想定見直しと運営負担の軽減。ワーストケースやミニマムも議論しておく必要あり。今後、戦略的にいろんな事業を展開していく中で、財務面での優先順位をつけて協議会最終案を提案する必要あり。
- ✓ コンパクトな学会として学術を中心とする選択肢もあるかもしれないが、基礎と応用を両輪に産官学連携を推進してきた繊維分野の発展型としては好適ではないと思われる。持続可能な学会運営と会員へのサービス向上を目指して、決してシュリンクするのではなく、合併により新たな展開が可能になることをどう提案していくかが今後の大きな課題。繊維系3学会として上手く連携しながらやっていけるのもこの分野の特徴。会員からの期待もある。
- ✓ 3学会合併決定後、新学会がスタートするまでに具体的な選択を検討すべき。日本を代表する学会のアクティビティがどんなに素晴らしいかをスタートと同時にアピールしたい。
- ✓ 新しい学会でどういうスタートを切るのか、ゼロベースでの検討が必要ではないか。当然ながら、これまでの活動の有効なリソースはしっかり活用しながら展開していく視点を持つ。→コンセプトは理解できるが、研究会など個別会員の思いも組み上げつつ、どう説明してどう展開していくかの配慮も必要。現状アクティビティが低下することのない計画と説明が必要。

【ビジョンとミッション】

- ✓ 統合は一つの手段でしかない。其々の学会がビジョンを持って、その中の選択肢の一つが統合であるとい

う言い方でないと、会員の理解は得られないのではないか。

- ✓ ビジョン・ミッションがリンクしていないのではないか？現在はそれぞれ3つが独立した団体である以上、個々の将来構想を踏まえ提案とすべきではないか？→各学会の目指す方向での合併案と承知している。定款等において、それらを踏まえて取り組むべき方向性を唱っておくのもよい。
- ✓ 川上・川中・川下、それぞれだけでの深掘りだけは「繊維」で縛られると不利。繊維という括りで繋いで、基礎から応用までを繋いで、新しいものを生み出す、新しい価値観を生み出す方向性が重要。
- ✓ なぜ統合するかを丁寧に説明すべき。各学会で検討してきた将来構想の共通項として合併が位置付けられるべき。
- ✓ 分野融合を学会としてどう育てていくのか→同じ学会、同じ雑誌で発表することも重要。魅力的なPFを作っていく必要がある。

【研究会】

- ✓ 継続前提ではなく新しい学会として「ゼロベースで生まれ変わる」べきではないか（継続を認めないということではなく、しっかりした理由で責任を持って提案していただく）。
- ✓ 「ゼロベース」には様々な受け取り方があり真意が伝わりにくいのでは？「ゼロベースの理念」でよりよい研究会を作り上げていく（既存研究会に関しては、活動をこの機会に見直してほしいというメッセージを伝える）。トップダウンではなく「ボトムアップ」の提案に賛成する。
- ✓ 合併による新たな研究会の提案を期待したい（研究会は会員増強の機会でもあり、さまざまな目的があってもよいので、少し整理して提示するとよいのではないか。観点の例：大型プロジェクト立ち上げ（時限的）、会員以外の参画可否、企業に取っての位置付け（社会実装・人材育成、情報収集・人脈形成など）、研究会運営における負担感の軽減、合併後の分野融合による新たな提案（リーダーの育成・支援）。
- ✓ 研究会は開かれた活動を展開してもらいたい（敷居を下げて新規メンバーの参画を推進）。
- ✓ 研究会議論において現状は現場の人が入っていないこともあり、合併に対して重要な課題を決め、コンセンサスが得られたら、あとは走りながら検討していく戦略も必要ではないか。
- ✓ 一定数の賛同者のもとに手を挙げていただくなど、研究会の具体的な提案方法は②で検討。ボトムアップ型なので若手からの積極的な提案を期待したい（引き出す工夫は？財政的支援、外部資金獲得などの目標設定もありか）。
- ✓ 合併にあたり税務・財務的な対応（資産等の継続、更地必要性）を確認する必要はないか。研究会の財務管理（現研究会からの引き継ぎ）なども今後の課題。

【支部体制】

- ✓ オンライン化も進む中、支部を設けなくてもよいのではないか。一方、支部単位での他学協会との連携、本部行事だけでは対面行事参加への地域的負担差あり、支部単位での交流も重要性など支部の必要性があるとの意見あり。→運営負担、人脈形成、区分け、役割分担などは検討課題ながら支部の役割は重要。各地域における会員所属機関・企業などの情報や会員のいらっしゃらない関係機関への働きかけなども含めて検討。

【学会誌・論文誌】

- ✓ 繊維学会での学会誌電子化に関するアンケート結果が報告された。グーグルフォームでの回答のため、ITに強い方が回答されている可能性もあるが、多くは前向きな回答だった。
- ✓ 学会誌電子化における課題として、購読料、広告料など。後者に関しては、紙媒体での広告減少、HPバナ

ー広告やメール送付時広告などでの代替可能性、パッケージ化との整合性などについての指摘があった。

- ✓ 学会誌電子化に向けて、紙媒体費用請求などの方策もあるのではないかと。将来的に電子化は必須であり、WGでも検討されており、ロードマップ提案も含めて②③での検討とする。
- ✓ 論文誌に関して、J-Stageが国際的に認知されていないのではないかと。JFSTのプレゼンス向上も含め③として検討か。

【学会名】

- ✓ 合併賛否の議論が学会名に過大に引きずられてしまう懸念はないか。学会名に関して会員アンケートを採るのはどうか→新学会の定款案に必要であること、また、どのような選択肢とするかも難しいことなどの問題あり。
- ✓ 「繊維学会」では新たに生まれ変わるというメッセージを発信しにくい、繊維学会以外の会員からは賛同を得られにくい。「機械」の名前がなくなることが残念との意見もあるが、新学会として生まれ変わるという観点で了解いただいている。各学会での思いや構想などは、学会名だけでなく定款等に反映しておくことで対応できるのではないかと。
- ✓ 繊維学会としての対応は別途検討させていただく。

【研究発表会・夏季セミナー】

- ✓ 繊維学会から、年次大会、秋季大会はメリハリをつけて企画・開催（第一次合併協議案のとおり）、夏季セミナーは開催見送りを提案。
- ✓ 夏季セミナーは大きめの講演会という理解であり、必要に応じて講演会を拡充することでもよいのではないかと。夏季セミナー見送りに異存なし。
- ✓ 広告収入がなくなることとは問題ないかと→昨今の開催ではそれほど多くはない状況。

【テキストイルカレッジ】

- ✓ ゼロベースでの見直し、蓄積されてきたコンテンツの有効活用、新学会の中でどう位置付けていくのか。
- ✓ 特に企業等からの開催要望が多いのであれば学会ミッションの一つとも位置付けてよいのではないかと（啓蒙活動など）。テキストイルカレッジを重宝しているという意見あり。
- ✓ 学会がテキストイルカレッジや講座をビジネスとして実施するのは無理ではないかと。また、学会の事業として優先順位は高くはないのではないかと。手間と時間がかかっているなら、繊維系大学や民間OJTにコンテンツを提供して共催等でよいのではないかと（効率的に運営することで事務局経費の圧縮にも繋がるか？）。
- ✓ 原案の5講義20テーマが適切かどうかは別として、大学以外に企業からも出講いただくコンテンツを有しており、現状、企画運営負担は過大ではないと考える（一からの立ち上げは難しい）。
- ✓ 会員以外にも提供しているが、当該分野の振興と人材育成という観点では新学会のミッションと位置付けてもよいのではないかと（ビジネスではない）。
- ✓ 受講証明、資格認定などへは未対応。将来的な検討課題か（必要か？実施可能か？）。
- ✓ 最終的には三学会長で方向性をご判断いただくべき。

【財務・事務局】 繊維学会提案のグラウンドデザイン等を説明し、意見交換

- ✓ 人件費3000万円の負担が可能なのか（少なくとも合併後しばらくの見通しは）、法人会員の会費に依存してしまっているのではないかと→新学会の方向性やアクティビティをしっかりと説明すれば現状維持は可能、スケールメリットを期待、一方、企業負担軽減への期待、新規業態の参画は難しいとの意見もあり。→法

人会員収入を現状の2/3という算定はそこそこか。→事務局経費を賄えない状況となれば、人員を削減せざるを得ないのではないか。サービス低下にどう対応するか。

- ✓ 会費のパッケージ化は企業・学会側の負担軽減のための案、ただし、今後、検討の余地あり。
- ✓ 今後、最終案を提案して企業へのヒアリングが必要。その際、アクティビティ／サービス面でも、新学会参画のメリットをしっかりと説明する必要がある。
- ✓ 二拠点のメリット、財務的に成立するかどうか、大阪拠点の要望も多い。
- ✓ 事務局業務の棚卸しの結果も踏まえて、必要人員を算定、予算措置が可能かを判断してく。
- ✓ 一拠点化の境界条件：事務職員が4名を切ってしまうと2拠点は業務管理や効率という観点で難しいのではないか。
- ✓ 各業務の工数を見積もり判断すべき（一人あたり12人月が基準）。一方、会員増強を図っていくべき、自分たちでコントロールできる催事は重要で、事務局に余裕を持たせて新たな取り組みも可能となるのではないか。
- ✓ 事務局職員負担の適正化を図っておくべきで、事務局改革が必要。
- ✓ 粗々ながら学会運営負担の見積もりを検討した。合併による運営負担の軽減や課題の抽出・対策などにも活用していけるのではないか。
- ✓ 各事業の支出の中に人件費が含まれていないのは問題。本来のコストが計算できていない→事務局業務の棚卸し結果も踏まえて、必要人員（人件費）の算定が必要。→高平事務局長、山本事務局長を中心に事務局業務の棚卸しを準備中であることが伝えられた。

【今後のスケジュール】

- ✓ 今決める必要はないのではないかと→多くの会員の意見を伺うということで年次大会の機会を活用したい。後ろを決めている訳ではなく、状況によっては後ろ倒しの可能性もある。
- ✓ 課題や反対があるのであれば早期に把握して、できることは対応しておくべきではないか。
- ✓ 最終案には、重要なポイントはしっかり盛り込みつつ、幅があって柔軟な対応ができるものであるべき→カテゴリー分けの①②③で対応

4. まとめ・今後の対応

- ✓ 追加の意見等があれば、メールにて連絡いただきたい。本日のご意見を踏まえ、最終案に向けた方針等について、メール等にて相談していく。